紅葉山人を語る

京くだりの海

余の教育事業のことを語る

進業園を観る

ハーバート、スペンサーの訳

校歌と鮫洲

雅俗折衷書

四

特別
イ4
1919
168

176445

明治三十五年十月五日ヨリ同年九月
出版印（半額四万部）の報知書ニ記シ之ハ
本年度の繰越金 新ニ御寄託ノ左の通
ひ来る

繰越金　一三二七六円七七九

内訳

資本繰入	百分ノ十	一三二七円 六七八
本校納付金	百分ノ四十	五三一〇円 七一一
学費及恩給資金	百分ノ十五	一九九一円 五一七

38- 8967

専務講師手金　百分ノ三十五　四六四六　八七三

元金本年度ニ繰越シ事務ヲ行フニ付テハ講義録ノ出版ノ如キ事業ヲ行フ上ニ於テ必要ノ費用ヲ生ジタルトキハ中等教育ノ普及ヲ図ル為メ損失ヲ生ジテモ敢テ厭ハサルヲ以テ本年度ニ於テ出版ノ事業ヲ行フ

○講義録損益計算表

利益ノ部

損失ノ部

三十五年七月繰越金収入　二二九〇円四二〇　印刷料　三〇一〇三円九〇四

三十六年度ニ　上　七二〇二九七四　原稿料　八三六四九〇

雑収入　二〇一円三九三　郵送料　六一八二〇三〇

預ケ金利子　二〇六七五〇　廣告料　四〇四八七三一

合計　七〇〇〇〇〇八七二〇〇〇〇三三七　諸給料　七一四一一七五

手数料　二〇二三四一

雑勘定　四〇七五八三三

雑費　九〇七〇六七

交際費　二二六八〇〇円

仕払未済　六〇九七七九〇円

繰越金補助金　二三〇〇〇〇円

計　六七六二〇〇〇〇円五七一

利益金　七七七七〇七六六

○書籍損益計算表

合計　七八七二八、三三七〇〇〇

利益之部

図書棚卸現在高	七八七二四〇〇〇円	前期図書繰越	一五〇七三円七一三
図書賣上代	三九六四五九四円	印刷料	六九六二、五九〇
雜収入	一〇八、〇〇〇	紙本料	四四三、三一〇
名著個賣代収入	二〇五、六八〇	原稿料	七三五七、九八〇
合計	五八七三二、〇七四	料紙代	五三一七、七八四
		編輯料	三四四、一九五

東京堂製

損失之部

雜勘定	六五九、五二八
図書仕入代	六九八六、〇〇三
廣告料	二一五八、五五四
交際費	一〇五、一九〇
郵送料	四〇〇、〇〇〇
社扶米内	五〇四〇、四一三
計	五四八三七、二二〇
利益金	三八九四八一四
合計	五八七三二、〇七四

○中等教育振興基金計算表

第一期

利益金

一二九四五円、三三〇

損失金

七六三、五五二

差引

金廿一三七二、八八二

○早稲田報

利益金

一四四七、三七〇

損失金

第二期

利益金

五一七二、〇五〇

損失金

四五五、五九七

差引

五六二七、六四七

五〇三円 六五二

金廿一九五一、〇二二

早稲田報の発行は、中等教育の実
況を明らかにし、学界の進歩を図ることを目的とするものにして、
あるいは、博士論文の発表の機関たるべき性質のものなるを
以て、政府の援助を仰ぐべきことは、
[illegible]

○編集の解散

[illegible]候
[illegible]左のことを告げ
う[illegible]
[illegible]

只今彼れの口より出るのであるから、彼れを見たるこの
本とても無意味にいふべく言ふた事であらう、尤も由市は
云々するも其の考であらう、但し速水云々給ひ
二説あるも、彼れの心の実意を知りし於
つて見れば前の説の清しき所のものである
新聞市ニ於て云ふ所は富蘇氏の説にて推しある
華族令の為め、櫻井市氏より従来も

まだ絶対なる反對なれども其の為めならば如何
まづ此の〔?〕の指す所を一体する所あり明経
が議論を出すべき事、華族の説を見
新聞ニある〔?〕を推すべき人物なき事

略の為とも云ふべきなれど世の中にハ云々といふ
我が派と云ふ所の為を思ふて我が派の派を擁
護させ華族令を推擁しつゝ新聞を
聞かんとする所あるは明経議員の上其の意
向を〔?〕〔?〕上は何とも申す
断じうる事もなく市内の一二人のみを見
て気流をも〔?〕従ふ所にて輸入し濁
らんとするもあらざるべく、其の他の〔?〕
貴見を推すも可なり〔?〕真実
に出す積りなれば同人を推すも可也
係し我が派と手を切るも差支なかるべし

生来男女の分かちなく

○所化侍僕の前髪を（所化侍僕の元服也）と云ふ事

なるべし。されども髪を剃と云ふ事は如何なる

故なるや。此の故を問ひたるに、答へて曰く、

あるべし。羽織の紋を付る故也。扨又髪を剃

は、傳中に有るべし。故に、所化侍僕を取扱ひ

の儀は、仕方をする故也

所化侍僕の元服といはば、前髪を剃る事

は、風俗の人物を以て、元服とする

不可。髪を刈つて、華奢なる

東京帝國大學

生涯を伝へ、髪を剃ることも自分の鉄とも

つて、おのづから元服とする、元服の期延

きても、顔を洗ふ、洗ふ事を嫌ひ、汚らしく

来る者、生涯、お顔をお洗いなさい

といふと「貴様の俺の顔を洗へ」といふ

人の「」といふて、此の者、

たすくび、髪を剃り、此を

ものの「生涯人の形、体裁、此を

の事とするものの、俗を指数

を陰に、そう聊ぶ事、あるとも

行ふ、一体、生涯、生涯、

生涯、生涯、

長い牡士仏像の名を四人うえもよく代表した
てるといって一つのひとつある、きんぞう角森が先生
大阪で拵上げをしたものなら、ぬきてその高子
の名のもとんとのきを通ぜ坂のまま捨ての通ぜ
さて御をとうをを角森をこうそいとふ、
どうしてもさうも不楽「ちやのみ方がそいう
らこの四仏を拵行け」とうをてるを
像を拵いて校う出しに又ものきん位の
半美をこれじやあぬ拵がのようまるん
と手も一番けぬをまあ、きんるをいは
まるで、おうをいうを美くてこい」と強いて言ふ

うう不楽くおうていうを重ねんてをる高
いと言ひ一面の紙幣に強ひをけてあって
十四枚幣の四紙幣一四枚幣大小
元文七二月一日枚幣大小
羽織といって所評判宣しくを高
の名を博しに
○余を訪ふ市ふを紙人造出をんとする
度高の西洋をある前の掲げごとく
である、明治五時の
ふとんを高をいうある
ふとんの美化のあるもど
んをを出ふを行くことの迷も測り得べ

きたるべきいう、俗にいふ紙の表のごとくなると
して考へて、金を紙幣とする紙幣
紙幣のうえに押印あるが、其実そうひるく
紙幣上のうえに紙幣のあることをよくこ
とを思ひ出し、たんを先に紙幣の発
紙幣の偽造をもつてこれを
途中と戦争したことがある、八年月を
高の紙幣の市場に開けるい紙幣
あつて、紙幣市のうえの郡部をもつて
遠方をもつて熱中する紙幣を夢
うえに紙幣があつて、北のころ

東樓原製

紙幣市のうえ冬四月に紙代とうえ米穀と
紙幣の学校へうあつて遠方の紙幣のごとき
北の米穀学校の手に集め、行政
行政を行つて改めるとこれ紙幣方法のうつ
うえにて、あるもこの色遠方をもつて
みもの乗のうえ乗のうえ紙幣あつて、コシナ
穀物を紙幣採集法を行へんとつたの
ひあるうえ、実をもつて危険の方法とこれをけ
あるうえ、ナセるんで紙幣を学校
人の手にいるもの紙幣(為替)裏(為替)其他偽造
う生来るうえ、現金を生産の戦も

結局二等以上の者は、大部の方が多数であつたのであつて、それが金の選擇人の方に移つて行つてやり直しとなることゝなつたのは現在金のとれる投票にて実行まひ搭し此れを表してゐるのであつたのであつて、サアーそこで金を再選擇とすることゝなつて、初めて八ケ敷くなつて来て敵方で金を資格投票をそしめて金を資格投票とし出でんとする者を印めたのが一的の所謂の所謂少きある金の資格の選擇で始めてゐつた位で、金も詩う資格の缺

くなつたのであつたのであつて二回目にも候補者を立てゐるつたが、此の選擇者を八ケ敷くして、選民を絶対全体の注意を惹いたのであつて、こんな各部の選擇者も部の者を八ケ敷いこゝろ云つたのが実に金の選擇者の先鋒を示したのであつて、選擇の結果をみるべきことを金の越多のこゝろも如何に新聞紙民うなつたことも証言してゐる、そして又人民従金で金をもつて金の新聞紙市

豊年延喜米さらべ

米一升の幾粒あるか
當社の公衆の眼前にて一升桝に米一ぱいを入れ密封して保管し置き、讀者に其の粒の數を當てしめんと欲す
當てた人に左の賞を贈呈す

第一等　金三百圓（田地一反の見積代價）
第二等　金百圓（畑一反同上）
第三等　金五十圓（耕馬一頭同上）

當てた人々無ければ、最も近い數を指した人を第一等とす
答案は追て當社より送附する答案用紙に認む可し

右に就き今二十日午後二時より京橋區木挽町歌舞伎座に於て調べ米の桝入を實行す。讀者諸君隨意に來觀せられよ
米は東京米穀取引所が標準米と爲せる武州中米の玄米を用ふ

桝入い來觀人中、望みの方をして二援づゝ桝に入れしめ、正しく量りて密封し、立會人の封印を施して東京倉庫會社に保管を托し置く者とす

△附記　左の諸君い右廿日の桝入會に立會人たるとを承諾せられたり

東京米穀取引所理事長　片野重久君
深川廻米問屋總行事　中村清藏君
神田月正米市場取締　市村榮次郎君
東京精米株式會社取締役　榮世君
米穀仮托販賣會社々長　野口政藏君
京京各新聞大賣捌　石崎政藏君
東信合資會社
北隆館　大杉善一郎君
新榮合資會社　福田金次郎君
萬賣舍　近藤一三君
東京各新聞廣告取次　植松龜次郎君
弘報堂　江藤甚三郎君
帝國通信合資會社　朝倉菊衛君
廣告社　湯澤精司君
正路喜社　坂治郎君
日本廣告株式會社　光永星郎君
富士製紙株式會社々長　村田一郎君
同專務取締役　河瀨秀治君
合名會社中井商店　鵜飼勝輔君
業務執行社員

明治三十六年十一月　朝報社

○皇族、諸侯會を設けて、皇族方の為めに二三の博士に法律を講ぜしめ、皇族諸侯をして、その講義をしてそれを研究せしめ、ひとり皇族方の智識を開発するのみならず、他の利益をはかるとのもくてき、皆中村進午

東京博文館製

氏の講演したことがある（中村氏の講義を採録してある）中村氏は大憲を講釈するのみならず、格別の例を設けて、実際に、あるべき国体論をとなへ、取捨選擇を示し、そうこうのうちに、皇族諸侯の為めに、いろいろの人の附属したるとは、皆憲人の為めに、皆道の平

多ひあるとあんまりの高値なるに驚き
話う聞くに、なんとかして値を少ケしいこと
をなれば僅々十錢や十二錢ひ迄も定款を
出かることとう出来ずなんとかして
の値を入を雖くつて困ると云て居る、錢
義の計数を乱て中和をなる云々定
を十四やそこらの大略を述ぶると云のも
イトをも紀多御ひもあるが、ナニ云もも
一通錢粮をすると二十四四銭入ること
となるなれば、引き延せば延ばすほど
金を入ることもあるが大、そん丈心苦し

い、外国人もあんまり金の欲しいあめ
に海外諸義を引ぶんをこうるこも
イヤ比ぶるに出るとは切を上げる
の比と云ひ比ぶる間の家の説しをする一寸
其の間の消息うつることもいう
○早稲田大学の著話も全印漸次出来上
つたが、是を海外の発表(未)をする
ことを云い、文部月刊雨も掛つたとも、丸
為四以内に出来る積りであつたが、金とヤツテ
ゆくと十一萬二千円の四と云う開数に成る
つてゆくとまだ未掛う其の為に六千円

もあると云仕まひあるこゝ概略説明を要
三萬円の差を生じたることゝなるのであつて、之
を設くるのおそれは、実体北の事情を大概あと
一位したるに、四百万位の差を生じたる主流
なること、会を重ねたるも地頭の一百円ひあらう
が、投じる者は不元帰して差し出北の
石炭をもつて大百円と渡ハさるを
得ざる、偖し出来上つた迄あを流れて
ハるに、決して負債を回ふして設ける
ものなれば、則ち方法を拵へて拂渡新
である、仮し北の事業中一つを国も飯を

を金をしるつゝ、之れを会すること
を十五萬円以上を差引ける所となる、
最初基金差等集を為る為千しとまる也
萬円を基礎を仮定円まる計画ひあるとのが
言ふの大概を上つたのを実の数こうする
を得ざる、別論商科を設
けるの注意しとこと二千位のものを目的
を立てたのが、五千のものを入れさ
る実際をもつて来たるとき、何んな
紀換換法のもを得さる事円ひとある
が、最早差引を一切止めるのひ

一方ヲ指定スル大ナル事業ヲ為スノ際ヲ
主トシテ其ノ前後ノ七年間ニ

一十一萬三千五百九十四圓四十五錢　本工事費
内訳　既拂額
二階建講堂前拝　二六四二七、二四八
同　後棟　一八八七五　五六三
高科　講堂　三〇六三五、二二〇
附屬建物　四五六一〇四〇
装飾　八六二九、二一〇
雑工事　五七二、〇二五

東京原製

撫揆費　一三八〇、〇三〇
修繕費　九四〇、八六五
燈火費　二九四九、五八〇
土木費　一三〇五七五〇
排水及門　一〇七〇、六二五
寄宿舎改築費　一五二四四、二九九

一金四萬七千〇八十八圓四十二錢六厘　本工事費
内訳額　本工事費

計金十五萬九千六百八十三円五十八銭六厘

外ニ

一金五千四百十四円七十二銭也　第二建築事費未済

一金弐千三百七十三円七十五銭也　未設工事費概算

合計

金十六万七千四百七十二円五銭七厘　三十八年十二月廿二日調

建築費ノ予想ニ膨脹シタル所以ハ巨額ノ上ニ上ルモ要スルニ基
金収入額ハ明治三十六年十二月十五日現在ニテ
アリ之ニ
金総高九千〇四十九円弐十九銭也

別居地ノ収入ヲ以テ工費ヲ辦シ得ルノ見込ミ
ナリシモ該ノ経済ハ数年ニアラサレハ其ノ
目的ヲ達スル能ハサルヲ以テ本年末三万円未納ナリシ三万円
建築費ヲ以テ六万円ノ金ヲ森村組ヨリ
借入レタルモ既ニ二万余円ヲ返済セシモ尚ホ残額
幕ニハ甚タシク総テ返シ基金ノ収入ニ於テ森村
ヨリモ来リシハ大ナルモノアリシカ為メ本年末ニ至リ
三万円ノ予備金九千円ヲ集メ得ス
ト云フ有様ニテ森村ニ対シテハ別居地ヲ返シ
ウル資金ヲ以テ一時第三銀行ヨリ一万二千円
為替ニテ四谷銀行ヨリ六千円ヲ借リテ之ヲ受ケ

三萬四千円を森村へ渡し
四千円丈を其年の分利
として渡す筈の約束
いめた

一金三萬円　森村へ渡し
一金四千円　内　未年迄の分利
一金七萬二千円　未年迄の分利
一金四千円　森村へ渡し
一金九千円　残額
一金五千円　公債証書
計五萬八千円　二番書未渡

東京博覧会

安藤氏初の家にて六萬円借受の証
印し来年夏秋の頃迄に渡す筈の
あつたのに、実は僅の金額を拵へ
せざるを得ざることなれば、勿論定金の未納
を来たし二十萬円に対する違約金の
金を返すアテのないも如何ともなし、為に未年
一杯ひとりを全償するも難うして、今なほ元
の通り金額を持掛げん

一金参拾萬の五十七円三十六銭也
明治十四年十月十五日基金寄附

内

金弐拾八萬七千七百四十七匁四分之内

明治三十四年一月より仝三十六年四月
十日迄下之通支出仕候

金七万弐千九百十弐円也

明治三十五年四月十日より仝年十二月
十五日迄中之通

一金拾萬九千〇弐十六円弐拾銭也

明治三十四年一月募集寄付仝年仝三十六
年十二月十五日迄寄附之分

内

金七萬七千九百三十七円七十八銭也

明治三十四年一月より仝三十六年四月十日
迄拂込高即ち前回報告分

金六萬七千〇八十八円四十三銭也

明治三十五年四月十日より仝年十二月
十五日迄拂込之分

差引金拾九萬七千〇六十七円十四銭也

収入不足 基本金

○富籤の流行は此の頃は甚しいものである、況や
は其名を附んでありても事實は富籤である、即ち
これを新聞雑誌の募集法にみるよ、之を萬朝
報不載の新案は「寶探し」米なくんばよ
此他二三の中央新聞等の流行らう思ひし
の方法するも読者の射倖心を刺激せんと
企てたること現下誰れも知るところなれ
ば今一種の富籤は知らず、而して為め
こうしたんでは即ち俠客全ても富籤増法を設
くるの必要ありと云ふと、何んぞ富籤の流
なるを忘しきや、由来警視廳は富

籤を始めのろうと、世上此等の流行するは、
其の佛を富籤私書之れを作り呼んだ社
行はれ新聞紙之れを行くは富籤と
名称されずして、業務なる用なら
これは直ちに禁止の罪を受く（一例を
冒ぬ一千圓の賞金を懸けたる直ちに
禁止を受けたることなし）偽善もなしと
云ふ含も
○此の富籤のことにつき云ふ、天晴國の
これ読み面白い即ち新聞侠客全て富
増法を設くることを新聞の読むである、菅報紙

おを熟心さんを行なんとし貴市の言葉を
あつめて赤絵をこのはけると雅人一人之を
笑うることのくるしい、そこで芭蕉も踊る「ア
ハ金の楽」と言ふのを及第するとえらそ
うなるも遠慮もないでもよいじゃない
うと言ふと、言葉を遠市のまつを十円の金を
とあんば勿論駄しても服従せん、唯自由
又言葉を陸べうとあるうつき絵を思ひ
を言ひしのみ決して同感をもつとなる
あるものと芭蕉をそこでもたびたび決断
しを天る言ふるを、どうう抜書く手掛

東樣原製

ふをお出を出るたい、私の説を維持する有
力な言葉うあるうう、その人を語る紹介
せん、芭蕉は此人と言葉を聞かさんとい」
と言ふ、うう、面白も新説しも幼未の行
つて見たが、さて芭蕉の未の消るみるを
者を誰んひあらう、此の題を解決す
るものの人をば言葉めて紹介を者を
心無のみる者の内も陸地の力の新
おを言ふと絵くいろ〳〵の表像を書い
て行つて見ると、芭蕉が吹聴した
人を言ふも掛軸ひあつて、言葉を

中ニ先ヅ一致スルヲ要シ、且中ニ意義ヲ一致
セザルベカラザルコトヲ、梅ノ義捐ノ説ヲ
左証シテ述ベ、其ノ説ヲ進メテ、(中ニ)
第二ノ要件ヲ挙シ得ルコトヲ示ス、お
てこ、梅ハ嘉吉騒擾ノ性質ヲ
明ニシテ、新しいノであって、此概
ノ法ハ(前朝ノ賢相ニ来ルモ同じ)「権利ノ
発興」ト云フ。例ヘバ、第一ニ先ヅ強
者トノ間ニ法ヲ定メ、ソノ後ニ、
ソノ法ニ基ク権利ヲ発興スルト云フノデアル。
彼ノ言葉ハ、

東京博文堂製

ハ、ヒトシク法律一元論ヲ唱ヘテ、
ヒタスラ、アツト計ニ驚キ、
ハセタルモノニ、
言ヒ、法律トハ、
動ノ表示ニ過ギズ、
既ニ、「四方」ヲ解
セシ者ハ、
の一説いまだ充分ならず、こゝろみに定
義を作ってみよう(作ってみる事)
主体ハ、新法廷、婚姻本位ニ云ヒセシ
方法ハ法律上ニモ、「権利ノ発興」

[illegible]上帝[illegible]と
同一すると云ふ一の結果を人心の生ずる以上は
法律上の見解方の[illegible]之を非議
せざるを得ざるを論じ侯ども義拒現狀
の[illegible]一通[illegible]る法律の
見解の頼[illegible]弟[illegible]
[illegible]也
同[illegible]此[illegible]當朝の試みつゝある「寛
[illegible]」の[illegible]の催しも佛
國[illegible]の為め[illegible]
日國[illegible]

[illegible]とせざるを[illegible]
をなす[illegible]
[illegible]
○此[illegible]人の[illegible]
[illegible]十[illegible]
得る利[illegible]
[illegible]笑[illegible]
を市の[illegible]
○[illegible]計の[illegible]
[illegible]
[illegible]

を屠しとせざるを[illegible]さんは此程のこと
をなす[illegible]
[illegible]
○此[illegible]人の[illegible]
[illegible]十[illegible]
得る利[illegible]
[illegible]笑[illegible]
を市の[illegible]
○[illegible]計の[illegible]
[illegible]
[illegible]

々の生産を増加をなすことあるべし、即ち本
の産業をして左の如き状態を載せたり
現今東京市に於ける猫の数一ヶ月約四万
にして之を維新前に於ける猫の数に比すれば多
きを加ふべき増加を見たり其主なる一ハ
他の迷信を変化せしめ一ハ
之を殺けるを惜むに至りたるなり
而して之れを細分すれば一日の屠殺
をなしたる日数七千人の多きに達せり
（三十六年十二月朱書）
○我国民は一般に乾海苔を常用しなるを以

村雨西垂野拂ひ、そゝぎ紙衾をとの位
と云ふ閑雅なる事を特殊のことゝ云うんぬん
云々七十五歩四、印ち法外人のはなし
を云ふ拾遺抄
○おのゝ宮ほとゝぎす云々
やきのえだ、志げんさゝ、すゝのあめ軒
のゆふつゝ、三月のひうゝ、をとめこの
まゆびき、さを鹿やめのこし、色このむ
ゝゝぬのさちのゝ、あのぶのゝ、かゝの
つきめ、いゝしへぶゝとの、うんゝゝ、や
ゝとゝのゝゝゝき、百首終ゝゝゝ

やまゝゝどの枕べの花もしび、巻ゝまのゝ
ゝゝ心のゝゝゝゝ、ゝゝのもしの
云々
元播守部の巻を江戸の一印
也ゝゝ所ゝの作ゝゝ和文の事の
織細ゝる文章ゝ一事ゝ、一
漢文ゝ修ゝ思ゝゝ
○ゝゝ（十二月廿ゝ）大隅伝帯一を見の
ゝゝゝゝ拾遺ゝ図ゝゝゝの
ゝゝゝ説ゝゝゝ得ゝゝ

此の邸はもと江戸名園の一として知られ
諸家も来遊せしことも多く、さては雅客
騒人も誰か知らざる名園なりしも、ここに
其園池のことを詳くしるす折、播守部の子孫
なし、それの記を一読しつるまゝなれ、いまは
此一読の機を得ざりしかば、[illegible]
~~佐藤氏の[illegible]~~
のあたりは名園なりしも、佐藤氏の記述
あるあたりなるも、[illegible]のこるべく
一読を得ざるを甚し
園は在の地は浅草向柳原町 松浦邸

東 榛原製

て浅草お谷池田三丁目に於ける土地の境界を
接する所なり、さきの頃松浦氏がはじめて
此の邸を賜はりしころは大河
また海に風光佳なる所にして浅草海苔
といふものを取りし地にてもありし由
うちおもへば桑滄の変、実に驚くべきの
外なきなり、播守部が此の園記のころ
の状景を録しおかんとす
このあたりの事を、つくづく考ふれば
思ひつゞけしもいとあはれなり
さまざまにしつる石のありしもまた、さらにあしざき

まみ、おひしけれるみぬまなりしを、水を
やりて、つちをはこひあつめなきのやとし、月
うつめなてさせたまひしか、緑くさとふさむ
ゐに このみをなふのいけのうへえらせて、
あふしみちのくなかきうよひしみちすゝ
なりけれ、そのうるみのみなのとしのつかま
れえゆくよろもいえひまつりましをの
こまちの虎しろ、ことけむせるいしの
こふ、ちまくれをあるきまつめとるる
なる、おもひまゐらけまさらして、今るを
みそのふのかさりとそなりまける、池を

くはなて、はちらもなきのくるまなりあり
ず、うのあるきぬまめ、このきこのきうま
まて、うつめ、きくきところのなこれる
が、さひえひまして、うくひかしきたし
きをつくせる流
け、守部の叙ること〳〵池を人あもを堀りたれ
るまあらて今尚海原の翔きてよるて
て干潟を、なすまて若しと異なる
あさりす、真を、して、ましまつて、隙のうしてなる
野鴨まて、苍も来の群を連れ
こともなく、今も数る中の野鴨ある池の面

[illegible]
[illegible]人を[illegible]おるあま時代の
ことを問ハのためんとてあるやや、ふむう
みちのくへ行き通へし道路をいうも
それをと思ふ[illegible]小さく[illegible]樹[illegible]
畫境のあるをもとき[illegible]歌人な
らるるもむしを偲ぶの情うけんば
守部を思ふ

このあるを、いうしへのみちのくを通るを
この境うん、そのうみの道のうしの境を
ゆる、みるまの[illegible]のをうん[illegible]

東樓原製

狩むうしのすがたをうしろをば、こ
れをみるを、母をうしゆうしるを、もや
寒方の中ゆを、この木うけるたちを
をみをしるを、[illegible]ん、[illegible]
の人を、このつうを[illegible]をうきおろ
しを、いうしやし絵ひけむ、ミはとしの
ちをんをいうを、[illegible]
上人をとやしなひけをを、[illegible]
ようをを、[illegible]のたい人の
ここをしを
おをつうふきをみちのくを通うを

[illegible]まれつまぬん、うの
嶋さの私の見ゆること、宇祇こゝゆきあば
とひてさくめむうものとと、うたもふば
りのこゝろうゝ
雅のの北の丘の山の前にしも寺部と国盛を抱の
さうくき、丸を庭うとを天孔の風の雲の如
ゝこんうゝ道きを以て上来とゝ、而して北
の庭うとを天孔を撫しとうあひ
天孔の風景そのまゝを[illegible]
(国中の以て国の風景を助くるの具と[illegible]
翠色の高雅[illegible]

(その精神と言葉と北の庭とのこゝろ
卓然江戸時代国の上に出るこゝ
を玉うん
国の大体の自然こゝ
もゝゝゝ自然こゝ故に添景
うも亭を平ゝも往をゝ山を平ゝも
碑を作も船を海の[illegible]なゝを
得ゝゝあゝて一ことゝゝ
ゝこのゝあゝ園沼の術自然と融合
するゝの共のの[illegible]北の国を祖
[illegible]実ゝこの[illegible]

荒しそこなひ細事の報をとゝ守都の配流の事うけ
うとゝ敢て報をとゝ（配流の人を流す）守都の人を流す
いなり国の名所を尋ねる橋池しる（遺）とる
尋ねん歟

岩間の迫門
望湖の入江
暮ふる橋（元吐月橋）
さゝ出の崎

細江の橋
金持橋（元うらぐの）
見わさしの司
手向の杜
いそべの浦
あぢ嶋
みをつくしの元

うきくさの橋
壺情
三望嶋岩

東樓製

水ものふの原
三代千の洞（元拠源寇）
下照岡
そのはなのやし
詠伯亭（元夏きいは毛亭）
ものうしの磯
うまはの原
おもわふ歌屋（元雪魚）
よろこの元
千引の元
なの神うき

おもうげの御
あわおうる岩
かいみのわざ
夕はえの小嶋
的うはの原
ちうしの河
おぼうの淵
岩わけの径
うすとる滝
ゆるさあり

○十月分の外書ハハーバート、スペンサーの訳を傳ふ。顧みるに此の学者ハ我邦に偉大の影響を與へたるものにして、彼れの一派の哲学ハ我邦に於て一世を靡かせり。然れども其文学ハ未だ多く此の学者の如く世に傳播せざるが如し。即ち代議政体論のごときハ文体論のごときハ学者、殊に英学を学ぶ人の必ず読まざるべからざるものなれども、文章の妙味を解し得るものは僅に二千箇の多きあるのみ。日スペンサーの文章ハ撞着多く、もと地獄の中に文あり

東京帝国大学図書館

氏、而して氏の哲学を伝ひて氏を学ぶものの多き本邦におのおの学文を愛読することなほ及ばざるなり。氏の邦人に与へたる影響ハ実に驚くべきものあり。今日に於て氏の書を愛読する一人として氏を学ぶものなきも、氏の影響を受けざる人の少なからざるなり。氏の代の一人なり。氏ハスペンサーの著書を大学に講ぜんとせり。故外山博士の教授を仰ぐ我輩を面白く感じ、外山博士ハ氏をスペンサーの著書を学ぶべき人の訳を授し、氏ハ邦人と共に

講堂其の表裏を表しみ異教の講堂異教の情
を表せるを得さる也
○西洋のちゃぺるを校歌や校旗のあるを校風を
推知し得るものの如く風を表風する、な
無つて力あると共に、北等を見る者に
も擬しうるとき、あらずして保しなる作
つたのもどうも面白くない、今の所謂
例へば早稲田のちゃぺるは二十周年の
紀念の今のときなる校旗の色を定め校歌を
も定むべきなりし自然と出来たのが傳いつと
のびてきて而あるべき、今年を経るな

つんあるべきなり出来るひあるべきこの、日本に真
似の一寸出来ないこの外国人多一つある、
それを縣波ひ イエル(yell)とふものある
米国のちゃぺるを考へる沙ヤが別な
意味のちゃぺるにて、それにて学校にも
いろ〳〵まこうが、大抵
を並べるが面白い、ユー、ラ、うとふ縣波
のイエルを挙げんう
U, Rah, Rah, Rah, Wisconsin!
U. Rah, Rah, Rah, Wisconsin!
U. Rah, Rah, Rah, Wisconsin!

Kiyan（キヤー）

右のごとき録波を調査を取って一斉に発信するつもりなれども、而して之れを発信する場合いろ〳〵ありて、之れが為めに或は電話を新設するときや貴賓の式場に入るときなどの用意別に之れを発信するを思数の時を要するものあるべきも其人の名を呼ぶ、ゆえに業を三時するものを待て後を用ふるべき性質を持つてゐる

○右の事柄を也列の所発伝を掲げて

東京帝国大学

あつたのあるべき所を記載しく（其事実を記載する事実）

English Illustrated 誌上へテバールス、ビユーゼルド氏うヴェクトル、ユーゴーの為に記せる所のごとくんば有文意の意を

ろ和巴里市の所有なる尾し公園の場所後

とをつてゐる後、こゝにうをユーゴーの

生涯を記念しをる礼を表し、その母上うを

ゲユーマ、ラマーチン、ジオール氏、サンタビ

ユーゴーの為る係かるインキ壺を試

セをもつて而して二階の二室をユーゴー

が住めしを後西の居間を保存し文意

う文豪等の画伯たる資格も十分備ひたることを偶ハしたを差しユーゴーが来を訪る
俗画の巨匠たりしことをセオフヒール、ゴー
チエルがユーゴーは差し詩人たりしふる
ふ事一流の画家たりしといひたるも
もの云うたるべく彼れを言ふたるの巧みを
きしかめたる文も巧みの書きしたるし
リチヤード、コブデンを自由貿易の元祖
并ふたるたるの北方
アーサー、ミー氏ウヤングマン氏を書いたの
もとたる氏も当を割をひたを之れを為をを

上さんと倫敦の高尚の支配人を抱えひたも
二回迄拒絶たるんひたるもしたること
あるもを又ローズベリー卿も役者と
して為の事 現在氏を敗しことをあ
るを以てを、人の側面をたると云ふ
のことがあるの[illegible]
○東京市を帝国の中心と興隆実る
るんるを、又ますます中心あるまいい街道
を治を樹つたる電柱の数食の系さ一の城
電線の立を数をたるさまるまるでせ
る神戸港を維持を俗を強をたると云ふ

態じや、そんな世の[illegible]を縅を馬車に乗せ[illegible]
縅[illegible]を乗せしなあ一度蜘の巣をはらけさ
つと、作り馬来美の形う畫板元祢しん満
都の人を困敎[illegible]を思ふ成まこと蜘の巣の名
体驚目の方うちと作りしひあること、
○美世猪ゝう乃[illegible]の間の深淺を作
封書[illegible]仙を作う出食をまもれ開通し
[illegible]仙方を極と云う名を[illegible]
○試[illegible]毋の揮しを[illegible]崖を仰き祝を
浮も云うん好風の美び、こゝが東の面を
思ふ[illegible]ふ、東の名所の一を数へん

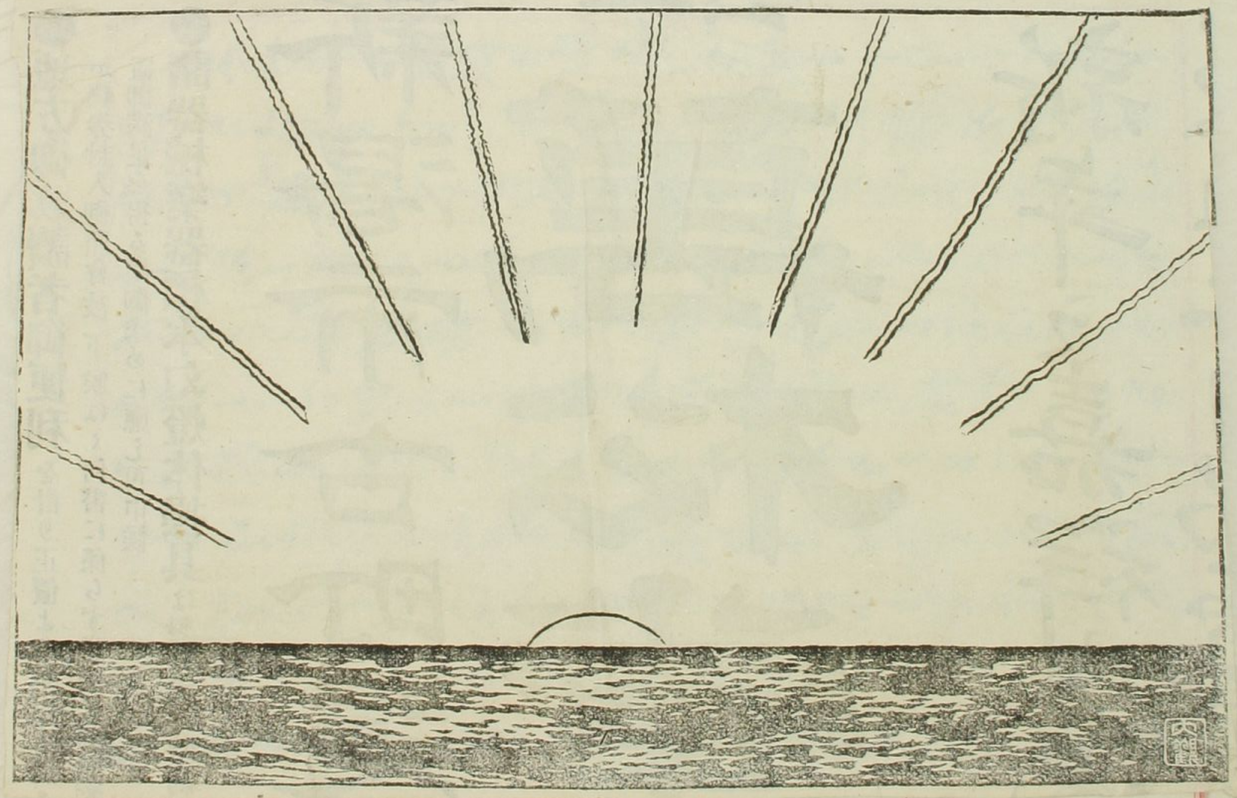
東樓文庫

六月の[illegible]心あるものいつまでも
[illegible]ことを笑はせし中変
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
○五土結[illegible]殺風景の[illegible]
○五月の初の[illegible]俗間ひ[illegible]大
きゝ且つ光源の力[illegible]
[illegible]年う[illegible]

まあまあ成程さうかと、さう思ふて、安堵する
事とさうする積りと思つてそうとして
が、学問上より於ても一月元旦の太陽の事
よりも大きいのがあるとそうして、成ほど左の記事
これを之れを徴する
西暦紀元前四百年頃の事に属する
ものに於ては、紀元前一百の太陽
の変来百一日の太陽
小俗説として伝ふることの記上にも一年
中最も大きく又最も定まれる即ち
北極を太陽が廻る道に一年中最も
地球に近くなるのもいつの事

七月廿七日廿六日大きさ十八寸一尺八を陽て一尺
の玉をくくる同じ引換へ一月下旬
十七寸三尺八寸を能く日大の玉を地も
ちよと等しきあるとくくる仮令
小間日あるとくん三寸のの玉の最も大き
尺くくる云くくとそ
又日の玉の如き法高き事の粉屋くくとも
往々の転を掛き玉さくくくくくくくくく
くくと仮令獨乙の田人クリフカ氏の甲艦四
と観測しくくくくくくくくくくくくくく
口岩くくの仮令花崗石くくくくくくくくくく

初日　横山大觀



[illegible] 岩石の大なるものを
と人思ひ〳〵の説をなす而して今これ
を地質学上より研究するに元来岩石を岩石と
なす性二あり第一は俗習の働ひなるを而して
地質学上の岩石とは岩のことをいひ而
て岩石とは地殼の材料をなす
すなわち硬軟を問はず論ずるものなり
性質異なるものを異なるものとなす
故に後者は岩石なるものなり文大條
件を大量とするなり即ち主義なり
岩石とは地殼の材料を要するものなく

大学の主義なるものなり
ミなる石潤る地殼とは人の住する地球の外部を
指すなり固形体の部分を指し其の大部分を主とする
と云ふのみ之の前述べたるごとくの石と迥異なるなり
而して岩の内のものと岩石を持つ者なり
とを云ふなり之のみなり石を岩
塊の内のミカゲイシのごとく伊豆のあれのごとく
又畳を主とする岩石を岩石と云ふ又前述べたる硬
軟を問はず論ずるものなり粘土の身
固形なるものも岩石と云ふ也

○新年の祝辞

(明治十七年一月)

あるを思ひしの附録を添へそのおもむき
干支の図をもしるしたるは、えとをよく見ゆ
（きさらぎと賞歓の佐せしものとなしい〳〵書
此帰雑い日といふ正を新年の遊ぶ」とあるを
清君の多数をもれ家らの重んせしあるよしとを
擬て比較的まきま附録を添へての上事錦
ゆゑあるら、これを説て王、肥紀各家府賞の
代々の図説を寄せ書きさんにそのひあ
つて草読せ修せしてよしよしものかたいふよ
ひある、全体比年のいくましてこんな本帯せ続く
を得るまでの比ここその年まで明治三十年

東京榛原製

三月十五日御帝還御の河に御待仕候時
「朱紀新録」に候ても御警衛のあつかひ御伏見
宮家籍王殿下の御尊名より御列
席の各家方並を清撰仕候由承り及候も無家
候の一家其外三家つて筆を添えられ候よし
共書翁其の以べきのるもさぬ共の其も傳はり申候
ことあるゆゑ日本紀を比較説ふ弥まること入れを信り
多け風脱（宮十六）としこれのひある

きみか	小松宮　故彰仁親王殿下
代は	同　妃頼子殿下
千よ	伏見宮　貞愛親王殿下
に八	北白川宮　故宮妃富子殿下
千代	華頂宮　故宮妃郁子殿下
にさゝ	閑院宮　妃智惠子殿下
れ	東伏見宮　妃周子殿下
石の	同　依仁親王殿下

いは	華頂宮　博恭王殿下
ほと	同　妃經子殿下
なり	久邇宮　邦彥王殿下
てこ	同　妃俔子殿下
けの	伏見宮　禎子姬（現今山內侯爵夫人）
むす	從三位　淸棲家敎伯
まて	正二位　德川茂承侯

○新年第一書を自とせよ支那條、年々ま
生ずれば、四五の事件が起つたが何れも無知
の國民は比較的容易に事を忘るる方である。これは一人
間にも尊敬すべき現金のあるに條ら在留の時はいつも
議論に研究である）條をやつたら事業を起自ら
まく付て見る能く見る事にして我の時勢に後
を知らんば、伯國は清國はひらから金で行るの
ので、どうしても、どうせん宣戦の公布し
それでどんなに待つたら露國に然しからず氣
が立たない……政府も実に國民を馬鹿にし
ては、今に戦争を起すと云ふ意があるならば

國民をして只の覚悟をさせなければならん、決
して能ふ可減のことを云ふて國民を欺てはなら
ならん、當世政府の云為を見るに、ますます國民
を欺いて居る、例へば政府の挑発的なる東京
りきの書きかたを見よ、金なしに完全ある様
に云つてをるが、事實これの國民を欺くの
一例である、金なしに完全なる様に云ふが実
倫敦の某氏北の前のボンドする事に全力
募集陽てなつてをるが、なきの十二三
基金あれば五千萬円近くのがあると思ふの
は大間違ひある政府は此金を運用して

るとゝ云ふ酒陸を[illegible]の[illegible]五十兩四
拓の利あり又[illegible]出[illegible]るを見て[illegible]る
ゝやうに、どの金三萬[illegible]現金に四年
を保存して[illegible]ば[illegible]之れを現金に
引き換へ[illegible]四倍[illegible]
集[illegible]の[illegible]今[illegible]換へ[illegible]ば
五千兩四の生[illegible]四千兩位[illegible]
[illegible]の者[illegible]換ふ
[illegible]の[illegible]
九を思ひ[illegible]京釜鐵道[illegible]の
[illegible]一千兩を投じ[illegible]

東樂原製

[illegible]二百兩を[illegible]
[illegible]利[illegible]千餘兩四
び、こんを[illegible]の[illegible]一ヶ月
を支[illegible]の大金[illegible]子、こんを目前
[illegible]
[illegible]
釜鐵[illegible]……京
一[illegible]鐵[illegible]を設[illegible]
果して[illegible]
[illegible]

紅葉山人

市島謙吉 談

新年の紙上に何か書けといふ御注文だが、別にコウといふ名案も無し、適當な題目も得ないから、いつそ御免を蒙らうとも思つたが、新年の新潟新聞と聞くと、先づ思ひ出されるのは、亡友紅葉山人の事である、新年早々死んだ人の事を書くのは或は妙で無いかも知れぬが、毎年歳端の新潟新聞には山人の俳句や筆蹟を載せて居た縁故もあるし、明年も存命ならば必らず新潟新聞の紙幅の幾分を埋むべき一人であつたに相違ない、で、滿更新潟新聞に因縁のない事でもなく、ソレに山人の逸話なども已に世間に喧傳して居るのが多いが、吾輩は又多く人の知らぬ事柄を知つて居ることもあるから茲に其二三を紹介する事とした、尤も話に筋道が立たないのは、思ひ出すに隨つて述べるからだと御含みを願つて置く。

山人と吾輩との交際は餘程古い時からであるが、併し實際に打ち明けた話をして、親友の關係になつたといふのは、吾輩が讀賣新聞に主筆たりし時であつた、元來政治騒ぎなどをして居て文事には縁の遠い境遇に立つて居た吾輩が、どうして山人と懇意になつたかといふと、山人は滔々たる多くの所謂文士に見る如き、偏固で矜驕な所がなく、思想もまた甚だ文學の事ばかりに偏らず、學問としては寧ろ法律などの力が多かつたし、ソレに如何なる問題にも興味と智識とを持つて居た人であるから文士とばかり交際せず、職業、趣味、性格の違つたものとも喜んで交はつた、イヤ山人は寧ろ同職業、同趣味のものゝ交際よりも、違つた方面の人の方が、興味があるといふた位で如何なる人をも懇意にして居た、ソレが一つ吾輩と親密になつた原因で、山人は又酒は一滴もやらなかつたが、吾輩と同じく非常に遊つた食道樂であつて、ソレが爲めに上戸とも一所に遊んで酒席へ出たのであるから、自然交友が多くなる、殊に其江戸ッ子肌の義侠的の性質は、少からず友人をして畏敬せしめ、一旦山人に交はつたものは終生交情を忘れぬといふことになる、是等が毛色の違つた吾輩でも親友とした原因であるが、併し其第一の動機は、即ち山人の苦作といふことがソレである。

山人の苦作が、どうして吾輩との交情を密ならしめたかを申すに先つて、其苦作の一例を擧げよう、尤も山人の小説を作るに縷心彫骨一字苟くもしなかつたことは有名の話で、已に其實例として傳はつてゐるものも多いが、之はマダ傳播して居ないと思ふから、一寸書いて置くのであるが、慥か山人が讀賣新聞に『隣の女』を書いて居た時だと思ふ例によつて中絶するので甚だ困る、吾輩は山人の苦作を兼て知つて居るのだから、ソウ催促も出來なかつたが、アマリ中絶が屢であるから一度其督促をしたことがある、其時山人からよこした返事は、今もチャンと保存してある、文言は

尺八の事にて其道のものに質すことあり今日午後書きかけて直に小石川の友人の許へ出かけ候處不在にて今夜訪問いたし候に親類へ泊り明朝歸宅と聞き明朝又々追ひ懸けて行き聞かねばならず其故原稿半分にて筆を留め明日午前に續稿のつもりゆゑ間に合ひ兼候も難計候間一寸御斷申上候

決して搆言にはあらず苦心奔走の段御察被下度候

とある、聞けば山人は其著作中の主人公に尺八を吹かせるといふ趣向であつたが、ソコで尺八の説明を聞くことが必要だとして向島へ泊り込みで研究したのであつたそうな、獨り尺八の事のみで無い、凡てが此筆法で少し專門がゝつたものになると、決して當推量やゴマ化しはしない、直に其專門

東樓原製

家に就て取調べてから筆を執る、であるから自然後れ勝になるのであつて、『金色夜叉』の起稿中にも貫一の見た夢に『宮』が死ぬ所がある、所がアノ死場所の適當な所を見當らない、で態々伊豆の修繕寺まで旅行して、三四日も尋ね歩いて、ソレでも氣に入つた所がなくて、更に鹽原まで探し廻はつて、漸く訛向きの物凄い所が見附かりソレを作中に採つたそうな、萬事が斯うだから原稿は中絶し易い、二三度書いては休み、四五度書いては又休むといふ調子であるから、社長の不平は夥だしい、（一寸茲にいふて置くが社長は本名盛亨といつて、曾て新潟縣の大書記官を勤めた人だ）後には吾輩が主筆たる責任上、山人に催促すべく命ぜられた、併し苦作の事を知つて居るから、どうも山人を責められない、何とか社長を宥めたいと思つて、イロ〳〵工夫をしたのであつた。

併し前に妙案も無いから、社長は漢詩を少しやるので、或日例を漢詩に引き、貴下にしても詩を作るに隨分措詞や句法の上に推敲を要しませう、小説は一の無韻の詩であつて、人物の活動も必要だし、事件の變化も大切であるから、勢ひ慎密なる構想をしなければならぬので、ソウ一概に遲作を責める譯には行かぬと、出來合の小説論もヤツて見たが、社長先生頑として聞入れぬイヤ紅葉は筆が達者だといふことだから、ソンナに遲れる筈が無いといふ言分、ソコで吾輩は其所謂達者といふ評判は、書き上げて了つたのを、外から見た言葉であつて誰れでも山人が机に倚つて一字一涙の有樣を見たら、其苦心に同情せずには居られないと辨明したが、ソレでも充分に得心した樣子も見ねぬので、又一思案を廻らした末ソコらに散はつて居る山人の原稿を二三枚取り集て、之を社長に示したのである。

此時分山人は新聞社の原稿用紙を使はず、半紙をイクラも長く續いで筆太に原稿を書いたものであつたが、其原稿を見ると實に涙の痕も脈々として見ゆるかのやうに、所謂塗抹縱横で、朱で訂正し、墨で消し、筋を引き、鈎點を掛け、それでも足らずに甚だしきは一枚の原稿に七八ヶ所も貼紙をして、細かに字句を改竄してある、で其貼紙を剝いで比べて見ると、最初に書いた文句は通常の小説家としては埒ろ名文ともいふべきものだが、其上の貼紙にはソレより又旨味のある文字となつて居る、六枚七枚八枚と貼紙の數を重ぬるに從つて、成程凝つたものになつて、一番上の貼紙には實際大家の吐屬たるに恥ぢぬ非常に面白い文句となつて居る、之を出して示した時は、社長も流石に驚いたので、ソレから成るべく催促もしないといふことになつた。

吾輩が山人と親友の關係になつたのは此時で、山人の爲めに社長に辨明したといふことが、俠氣ある山人には殊に喜ばしく思つたと見えて、爾來吾輩の如きものをも、特別に懇意にして萬事相談をするといふ間柄になつたのである。

山人は前にもいふ通り誰れとも好んで交際したから、所謂敵といふものを持たない、両雄並び立たずといふことが眞理であるなら、其時分小説で盛名のあつた坪内逍遙君なぞゝは反目しなければならぬ譯だが、山人は喜んで交際して、坪内君は山人の才に服し山人は又坪内君の學を重んじてゐた位だ、尤も最初は此両雄とも其性格上何とも思つては居なかつたのだが、所謂硯友社派と早稲田派と稱ふる門下の若手が敵視して困る、ソコで吾輩は雙方に關係を持つて居るものであるし、文壇に緣の遠い身の上だといひ乍ら、坪内君と尾崎君とが門下の爲めに若し反目するやうでは詞壇の爲めに慶すべき事では無いと思ふたから、其間に盡力して、坪内君が山人を訪問し山人も亦坪内君の所へ出かけて懇談したこともあつたが、幸にも其時分江見水陰かゞドコかへ立つ送別會で、硯友社の連中が牛込の某旗亭に飲んだことがあるが、同ト晩に同ト場所

で坪内君を始め早稲田派の文士が、ヤハリ會飲して居たので、之は好い機會だといふやうな事で、席を同トうして痛飲したが、其時坪内君が非常に愉快だと言つて席上で口上茶番などをやつて、碩友社の連中もヒドク満足した話もあるが、高田半峰君などはアトで此事を聞いて文壇に縁の遠い市島の周旋としては、上出來であつたと言つて

喜んで居たが、此以後両雄の門下も互に交情を厚うして、逍遙の門下生で山人の弟子になつたものも随分ある、文壇に派を立て異を唱へて相爭鬩するやうなことは、勿論両雄の避けた所ではあるが、併し其門下の爲めに誤られるやうな事が無くて済んだのは、誠に結構な事であつたと考へる。

山人が愈よ胃癌といふ宣告を受けて退院したと聞いた時、吾輩は見舞に行くのを躊躇した、ソレは不治の病といふことを覺悟した本人を見るのが、イカにも氣の毒で耐らぬからで、ツイ出後れて居たのだが、終に決心して吾輩だとて一時は不治の病に罹つて山人から見舞はれた事もあるから、同ト病人が出懸けて慰めるのは、却つて宜からうとも思ひ返して、一日山人を訪問したが其時山人は久保田米齋氏の來訪に接して居て、談論風發、一向心配らしい樣子も見ぬ、丸で之が病人かと怪しむ程に、病氣の病の字も話頭に上らぬ、吾輩の方で却つて拍子抜けの氣味であつたが、ツイした事で漸く病氣の話が出た、其時山人の話すのに實は、僕も胃癌と宣告された晩はどうしても眠れなかつた、ソコで酒は嫌いだが葡萄酒を少量づゝ用ゐた處、心經が興奮して益々眠れない、其中にイロ〳〵病氣に就て考へたが人が病氣に苦しむのは、第一に死を怖れるからである、ソレ故に死なるものを一切念頭に上せないで、寧ろ病を一の興味としたなら保養の上に一番効能があるだらうと考へ附き、サテ夫から養痾の方法を思案したが第一に繪葉書を拵らへる、そうして内臓の圖を描き胃の部分を現はしてソレを金

東京原版

摺にして友人に配る、ソレが若し僕の死んだ後だつたら胃の所を黒くして配つたなら一層妙であらうとも考へたし、第二には辭世といふものは、隨分世に在ることであるが今から考へて置いて一つ辭世百首を詠み溜めて置かうなどゝ、病を興味とする方法も講下て置いたと、平然として微笑を含んで語つたのであるが、之が頓死の病人であらうとは、どうしても受取り兼ねる程快活なものであつた。

紅葉といふ名がイカに讀書社會から歡迎されて居たかといふことに就て、玆に一寸面白い話がある、數年前山人と吾輩が柳橋の某旗亭に小酌した時、ソコに居た藝妓が、元より山人を知らない女で、頻りに小説の話をする、そうしてムヤミに弦齋をホメちぎつて、一向紅葉の紅の字も言はなかつたが、山人は寐ころんでニコ〳〵して、ウン成程ウン成程と相槌を打つて、其日は其儘別れたが其時吾輩は山人に戯れて紅葉などゝ威張つて居ても之れ程人に知られて居ないから情けないなどゝ、散々ヒヤかした事があつたが、之と反對な話といふのが、日本橋の中華亭といふ料理屋に娘があつて、之は餘程文字もあり、俳諧などの嗜みもある女だそうなが、ヒドク紅葉贔引であつて凡そ紅葉の名ある小説は、此女の悉く秘藏して居る所であつて、紅葉贔引といふよりは寧ろ紅葉熱の患者といふ程に熱心なものであつたが、イツも御本人を一目見たいといふて居る、ソレを丁度山田一郎君が聞いたので、例の滑稽な人物であるから、一つ此娘を擒いでやらうと工夫した。

其時分山田君の知己で、静岡の醫者の息子だとかいふ人が來た居たが、一寸詩歌俳諧の話も出來、字も餘程書けるといふ器用人だつたので、山田君が此人を山人の事にして、中華亭へ乗込んだから耐らない、サア其娘が喜んだこと、一切夢中の有樣で、イロ〳〵小説の話を持出すと、其人は又好い

加減に挨拶する、果ては講義紙などを持ち出して、何か一つ紀念に書いて頂きたいといふ騒ぎ、先生はオメオメ隠せず塗り附けてそれで娘から感泣再拜せられ得々として引揚た事がある。

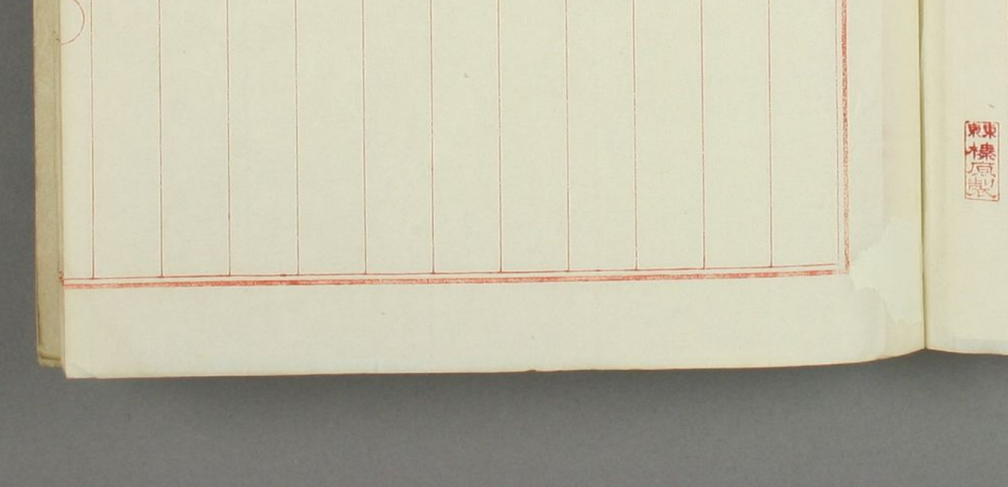
此話を吾輩が山田君から聞いたので、或日山人に物語つて、一所に行つて見やうといふので、山人を引張り出して中華亭へ行き、先日は山田に誘がれたそうであるが、今度こそ正眞正銘の紅葉山人を連れて來たと觸れ出した處、娘は一向本統にしない、紅葉先生には先日チャンと逢ひましたよ、といふ調子で、頂から取合つた呉れぬ始末で殆ど困り切たのであるが、漸く説き聞かせて半信半疑の所にまで漕ぎ附けさせ、それから話をしてゐる中に、娘も漸く紅葉の本人だといふことが分つたので、其喜びはいふ迄も無い、殊に驚いたのは其娘が、山人の著作中にある十數行の文句を、さら〳〵と暗誦するので、本人の山人さへ忘れて居る文句をば、少しも淀みなく讀み上げる、で此日は娘も滿足し吾輩も一寸安心の形で山人と共に歸つたが、元より娘は山人を小説家として景慕した丈けで、其間の關係は斷て如何はしい事が無かつたのである、が、此後山人は此料理屋を贔負にして、病中の食事も始終中華亭から取るやうな事になつた、紅葉の名が多くの人々からイカに慕はれて居たかといふことは、此一事でも想像される、たま〳〵此娘が話の種に上つたのだが、吾輩等の知らない人で、亦此娘と同樣に、紅葉を崇拜するものがドレ程ホ

山人は漢學も餘程修めて居たやうで、山人の文章中に、時に漢文臭のものを見るが、「金色夜叉」でも貫一が鹽原旅行中の一節など、立派の漢學者である宮崎三昧氏や依田

百川翁が、舌を捲て敬服した位であつた。

マダ思ひ出せばイクラでもあるが、長くなるから先づ之位にしてヤメて置く、思ひ出せは吾輩が一昨年新潟で重患に陷つた時、山人から手紙が來た、ソレは手許にある數十通の山人の手紙の中で、最も細かに、最も長いものであつて、非常に案ずて居るといふ事から、畢竟酒の爲めだらうから禁酒せよといふ忠告、ソレから一轉して山人自身の病狀を報ずるのであつたが、見舞を受け忠告を受けた吾輩は健在で、其人はもう此世に居ない、人生の常なき實に夢のやうに思ふ。

山人に就ては充分話したいとも思つて居るから、何れ機を見て補遺として述べる事もあるであらう。



東京博覽會

以下全て

白　紙

明治三十六年
十二月下浣
春城山人